

# 哲學研究

第二百四十一號

第二十一卷  
第四冊

## 地域的社會圈としての故郷と郷土（承前）

白井 二尚

### 四

出生の地をして故郷たらしめる故郷の基底として想定された幼少年時代の生活は、それと同様な地域的限定を廓大して持つ未開人社會及び女性の生活に、顯著に現はれる特質に於て充分明かなる如く、交渉の對象に就いて、多面に互り細部に及ぶ具體的直觀的把握了解を可能ならしめる。従つて此の時代の生空間としての地域に在るものは、斯る了解を持つ主體に對しては、熟知されたるものであつて、未知なる存在部分を持たないが故に、その未知性を克服して把握了解を進める爲めの緊張注意は必要ではない。更にまた斯く熟知されたるものは、常に主體に對して有利促進的なる側面のみならず、傷害災禍の側面に於ても熟知されて居るが故に、それは不可測なる危険を包藏することなく、此の限りに於てそれは氣味悪くまた警戒用心を必要とすることがない。斯くて人は幼少

年時代の生活の對象に對しては、あらゆる緊張注意と警戒用心とを去つて、安らかに寛いで之と親しみ、安んじて自己を之に託することが出来る。主體と對象との此等の關係は、對象が熟知されるところより來り、此の熟知の根柢には、熟知される對象の存立を成立せしめる交渉の様式に従へる、同一交渉の反覆が存在し、此の反覆は主體をして此の交渉に習熟馴致せしめ、従つて此の様式に従へる交渉に於て巧みならしめる。故に主體は斯る對象との交渉に於ては、勞少くして良き効果を多く擧げることが出来る。斯る對象を勞多くして效少き他の對象よりも愛好するは極めて自然である。

幼少年時代の生活の地域的限定よりする主體と對象との關係の、右に擧げた如き諸々の特質の間に、必然的な聯關あることは、例へばドイツ語の *Vertraulichkeit* なる言葉が、熟知精通を意味すると同時に、習熟熟練を意味し、更にまた親密懇意を意味する一事によつても明かであらう。幼少年時代に於ける此の熟知親懇は、言ふまでもなく相互的であつて、此の時代を過す地域に在るものが、我にとつて熟知親懇なると共に、我はまた此の地域にある他に對して熟知親懇である。熟知親懇なる間柄の者は、信頼し恃み合ふことが出来る。故に斯る間柄にある者に對しては、最も知られ難き心の中までも打明け、猥りに窺知し難き祕密にまで參加することも許容する。斯くてまた相互の熟知は完全に至り、相互の親懇は搖ぎなきものとなる。これ即ち *Vertraulichkeit* の根柢をなす *Vertrauen* が、一方に恃み信頼することを意味すると同時に、他方祕めたる胸中をも開示することを意味する

所以であり、幼少年時代を共に同一の地域に於て送る者相互の間には、此の *Vertrauen* が行はれ、相互が *vertraut* なる關係にあるを想定することが許されるであらう。而して斯く相互に *Vertrauen* を以て交り、何等の隠し隔てもなき全き熟知のある間柄に於ては、自己の如何なる部分も、之を他に對して蔽ひ隠すも何の意義もなく、従つて此處に於てはあるが儘の自己をその儘に流露する遠慮なきが交りの常態なるべきである。これ即ち *Vertrauen* を以てする *vertraulich* が、遠慮なく慣れ慣れしきを意味する所以であらう。而して此等聯關ある特質を併せた間柄にある人は即ち親友であるとするれば、*der Vertraute* を以て親友を現はすは極めて當然である。

右の如き聯關ある諸特質を有する關係を、交渉の對象に對して有する幼少年時代は、斯る關係を蓋然的ならしめる地域的限定によつて、他方また無垢無憂なる特質を有たしめられる。此の特質は右に述べた對象との關係が、不安憂懼を容れざるものなることよりも、自ら生じ來るべきであるが、地域的限定そのものからも、直接導き出されるところあるものである。元來不満は自己の有する欲望が満たされざる時に生じ、之が満たされざるを憂ふるところに憂苦が生ずる。而して欲望は必ず何等かの對象に向けられるものであり、此の對象の範圍が廣くまた多様なるに従つて、欲望充足の困難も亦多趣になり、充足までの時間長く従つてそれまでに感せられる不安焦燥の多くなる可能性も増大する。然るに欲望の對象は主體の生活範圍の大なるに従つて分化し、雜多とならざるを得

ないと同時に、幼少年時代の如く生活範圍が地域的に限定され、その交渉の對象が單純少數に限定されて居る時は、欲望もその分化少く單純である。故に此の時代に於ては、欲望充足の困難の複雑多様よりする不平憂悶が少かるべきである。これ此の時代をして無垢無憂なしめる大なる理由であり、此の點よりしても、幼少年時代が未開人の生活と共通なる特質を有つことは、改めて言ふを俟たない。自然の儘なる人間即ち生れた儘なる人間の生活を、人類の原始時代の生活と一致せしめ、此の時代の生活を無垢無憂のものとして描く者あるも、決して理由なきことではない。

以上の如きが幼少年時代の生活の特質であり、従つて此の時代の生活を基底とするふるさと乃至故郷は、即ち其處に在るものに對して以上の如き特質を有する交渉了解が營まれる地域でなければならぬ。併しながら、斯くの如き交渉了解の營まれることによつて、此の地が直ちに故郷となるのではない。己れが生れ幼少年時代の生を育まれて人となつた地域が「ふる」くなるのは、幼少年時代の地域的限定たる封鎖を破つて、此の地域の外なる自己にとつて新たな地域に出る時である。故に幼少年時代を過せる地に在つてその外に出ざる者にとつては、此の幼少年時代を過せる地は、未だ故郷ではない。然らば此の地域的限定を破らざる者にとつては、己れが其處に生れ幼少年時代を過せる地域的社會圏は、故郷ではなくて何であらうか？ 幼少年時代を過せる地域を、周圍の地域から區別して特定の交渉了解の可能なる地域たらしめるは、此の生活の地域的封鎖性と狹隘性で

あり、此の地域的兩限定は、主體が此の時代に一定の土地に定住して、此處から去り又は此處の外に出ることなきに基づく。故に一定の土地との結合、一定の土地への不斷の繫縛が、此の土地の上に營まれる生活に、右の地域的限定を課し、之によつて此の土地の上に成りたつ地域的社會圈が、特殊なる社會圈としてその周圍から區別されるのである。此の土地との結合、土地への繫縛の故に、此の幼年時代を過せる地域を、故郷に對して郷土と呼ぶことは、至當として認められ得るであらう。

郷土を右の如く定めるならば、郷土の外なる新たな地域に出た者に對して、郷土が故郷となると言ふことが出来る。即ち郷土と故郷とは、地域的には全く同一であつて、只此處に幼年時代を過せる主體が、此の地域の外に出るか否かによつて異なるに過ぎない。これ郷土が「生れ故郷」なる解釋を與へられる所以である。併しながら郷土が直ちに故郷でなく、郷土を持つ人が全て故郷を持つのではない。幼年時代を一定の土地従つて一定の地域的社會圈に過した者は、何れも此の地域を郷土として持つ。併しながら此の郷土を持つ者の中の、郷土の外に出る者に對して、郷土が故郷となり、斯る者のみ故郷を持つに至るのである。此の郷土の外に出た者が現在居る所は、郷土従つて故郷の外なる之と異るところである。故に此の郷土及び故郷の外に出た人の居る地域を、郷土及び故郷に對して異郷乃至他郷と呼ぶことが出来るであらう。人が異郷乃至他郷の人となる時に、彼の郷土は初めて彼に對して故郷となる。斯く郷土を轉じて故郷たらしめる異郷乃至他郷に於てある

ものと此の他郷の人との交渉は、郷土乃至故郷に於けるそれに對して、如何に相異するであらうか？ 人が一度郷土の外なる異郷に出れば、其處には今や故郷となれる郷土に支配し、彼がそれを自己のものとする事によつて人となつた行爲様式の、少くとも若干のものは支配せず、諸對象の存在が故郷に於けるそれとは相異することは明かである。従つて此等異郷の諸對象に對して、故郷に於けると等しい様式、即ち自己が専ら従ひ來つた様式に従つて交渉しても、その存在の或る部分は何れも把握し難いことが必然的である。單に故郷には無く異郷に於て初めて遭遇するものの把握了解が、全く拒まれるのみならず、故郷に在つたものも、故郷に於けるとは異なる様式の交渉に基づく存在部分に於ては、その了解に苦しむは當然であり、更にまた故郷に於けると等しい交渉の様式に基づく部分と雖も、此の様式を事實上具體化する現實的交渉が、その同一様式に如何なる偏差を以て配與するかによつて、故郷に於ける存在とは具體的には相異なる。斯くて異郷に在る交渉の對象に就いては、故郷に於て可能なりし多面的具體的直觀的了解が拒まれるのである。即ち異郷の人となつた者に對して、此處に在るものは故郷に於ては全ての存在者が彼に對して有した熟知性を有せず、之に代つて未知性を有するのである。

未知なるものは未知なる點に於て熟知されたるものと異なるが故に、注意を惹き、注意の緊張によつても猶その未知性が克服されざる時に、奇異性珍奇性が成立つ。未知性に基づく奇異性珍奇性を

完全に克服するには、此の未知なる存在部分を成立せしめた此のものとの交渉様式を、自己の行爲様式となし得る迄に、此のものとの交渉を實踐的に反覆する事が必要であらう。斯くして此のものとの交渉に習熟し、その交渉が圓滑に行はれて勞少くして效多きに至つて、未知性は全く克服され、此のものは熟知されまた親しみあるものとなるのである。異郷に出た者が斯く此の異郷に特殊なる様式を自らのものとなすに至らざる限り、彼にとつては異郷に在るものは、未知であり、奇異であり、また親しみなく親しむこと能はざるものである。未知性に基づく此等諸性格の聯關が如何に必然的なるかは、此等の諸性格が諸國語に於て、皆同一の *strange, étrange, fremd* なる言葉によつて表はされることから明かであらう。

此等の言葉に當る日本語「うとし」も亦、善く知らず、不案内なり、くらし等の意味と共に、親しからず、交り淺し等の意味を併せ有ち、未知性が親しみなき性格と結合することを示して居る。「うとし」を重ねた「うとうとし」は甚だ親しからざるを意味し、「うとむ」「うとぶ」「うとんず」等は、何れも親しからずおろそかにするの意味から、進んで忌み嫌ふの意味に到る。「うとまし」は即ち嫌はしの意味である。これ即ち未知にして親しみなきものが、如何なる扱ひを受けるかを指示するものである。

右の如き諸性格を有する「うとしき」ものが於てある本來の場所は如何なる所であらうか？「う

とうとし」と等しく用ひられる言葉に「よそよそし」「よそがまし」がある。然るに「よそだつ」とは冷かなる容子を形容する言葉である。更に「よそにする」「或ひは「よそよそにする」とは、隔てがましくするの意であり、「うとみ」捨ておくの意である。即ち此等の言葉の根柢には「うとく」未知なることが存在するのであつて、このことは「よそげに」が「知らず顔に」なる説明を與へられることによつても窺はれる。此等の言葉の基礎をなす「よそ」は即ち餘所である。「よそよそしさ」または「よそがましさ」は、元來餘所に於て遭遇し交渉の對象となるものの性格を表はす言葉であらう。換言すれば、餘所に在るものを餘所にあるものとして性格づける特質が、正さに「よそよそしさ」又は「よそがましさ」等の言葉に含意されるのである。「うとうとしき」もの「よそよそしき」もの「よそよそしき」もの「よそよそしき」ものは、全て其處にあるものが熟知親懇の關係にある郷土乃至故郷ではあり得ない。餘所とは此の熟知されたるもののみなる郷土乃至故郷に無きが故に未知であり、その故によそよそしきもの、在る場所でなければならぬ。斯くて餘所とは郷土乃至故郷以外の場所即ち異郷乃至他郷でなければならぬ。よそ(餘所)が「ほか」外他所別所など説かれる時、斯る所は郷土乃至故郷に對して、ほかであり外なる所他の所別なる所でなければならぬ。

「よそ」はまた「遠き所」とも説明されるが、狹隘性ある郷土の中に「遠き所」はあり得ない。郷土の中なるものは全て近く互ひに接し合つて居る。親しからずうときを通常「隔てがまし」と言ふが、

狹隘なる地域に封鎖されて、空間的に近接して居るものの間には、心に於ける隔ても無い筈である。地域的封鎖性ありし時代に於ては、空間的距離と心的距離との間には、單なる譬喩に止まらざる平行相關の關係があつた。「ちかき」が空間的近接と共に親昵を意味し、「ちかづく」が空間的接近と共に昵近親密になること及びならしめることを意味すること、また「とほし」が空間的離隔と共に親しからぬ意味の「うとし」を意味し、「とほどほし」が「うとうとし」と同義であり、「とほざる」が空間的に「遠離る」と共に疎遠を意味し、「とほざく」が空間的「遠放く」と共に、「うとんず」または「うとむ」と同義に用ひられることの如きは、此等の言葉が斯る兩義を有たしめられた時代には、空間的關係と心的乃至社會的關係とが、相即結合して居たことを物語るものでなくてはならない。「うとし」は「久しく交通せず」との解釋を與へられるが、狹隘にして封鎖性ある地域内に於ては、久しく交通せざることは無いと共に、その地域の外のものとは、交通は久しきに亙つて不可能であらう。斯くてうとくしてよそよそしきもののある本來の場所は、遙遠隔絶の地であり、郷土の狹隘なる地域外の場所即ち異郷乃至他郷でなければならぬ。此のことは未知と共に「よそよそしさ」をも併せ意味する friend なる言葉が、その儘異郷乃至他郷を表はす言葉 the Friends となること、また Fremder, stranger, étranger 等の言葉が、異郷乃至他郷から來た人、即ち外來者異人旅人等を意味すること等に明瞭に現れる。

以上によつて、異郷に在るものの根本特質、また此のものとの交渉に於て成立つ異郷に於ける生活の根本特質が、*friend*「うちし」等の言葉によつて表はされるところの、未知性を基底とする一聯の特質なることが明かになつた。斯る特質を有する存在との交渉の行はれる場所としての異郷と、郷土及び故郷との相異對照も、既に述べたところから自ら明かである。即ち郷土及び故郷と異郷乃至他郷との相異は、熟知とこれを否定するところに現れる未知、また *vertraut* と *friend* との相異を基底とする。未知なるものは自我に對して、促進及び妨害の兩方面の可能性を有するものとして對立する。従つて之に對しては常に此等兩方面の諸々の可能性に應ずる用意が必要である。故に他郷にあつては、常に斯る用意を怠りなく整へつゝ、如何なる可能性が現實的となるかに、不斷の注意を拂はなければならぬ。斯くの如き用意と注意とが即ち用心警戒である。而して凶なる可能性の存在する限り、捉へ難き危險によつて常に脅かされて居るのを感じざるを得ない。故に異郷にあつては故郷に可能なりし安らぎ寛ぎに代る緊張と、一種の不安危惧の念とを免れ難い。未知なるものが、熟知せるものに轉せられるまでは、他郷に於ける此の不安緊張は繼續するのみならず、未知なるものとの交渉に於て、未知なる部分に存する自我に對して促進的なる可能性は、之を知らざるが故に自我の欲望に應ずる様現實化せしめることが出來ず、自我の欲望の充足の不充分なるを免れない。此の欲望充足の不足は、これを意識する人の心に、物足りなき遣瀨なさ、又焦立たしさ淋しさ

を感せしめないではおかないであらう。他方また未知なるものは、之を扱ふに馴れ巧みなるに至らざるものなるが故に、之との交渉は勞多くして効少きを聊たなければならぬ。此の故に不快と憂鬱とを禁じ得ざるもまた、他郷に在る人に必至の運命である。

他郷に於ける存在の未知よりして不可避的なる、此等の緊張心勞不満不快焦燥憂懼寂寥哀傷悲痛等は、未知なる存在なき故郷に於ては、何等感せられるところ無きものであつた。即ち此等の諸體験は何れも、他郷にあるが故に經驗せしめられるものであり、しかも他郷にあつては、何人も必ず免れること能はざるものである。他郷とは即ち此等の諸體験を積ましめる所であり、郷土とは此等の諸體験を経験せしめざるところである。而して此の相違は此の兩地域に於て在るものの存在の未知なるか否かに基づき、此の相違は幼少年時代を其處に於て過したか否かの相違より來ることは、これまで述べ來つた如くである。他郷の人となる時に此の他郷に於て、郷土に於ては妥當し其處に人と成つた自己の行爲の様式となれる存在者との交渉の仕方が、その支配妥當性を失ひ、多面的具體的直觀的なる對象の把握了解が拒まれると云ふ否定が加へられる時に、全て右の如き諸體験は經驗せられ、此の經驗を介して郷土は之を経験する人に對して故郷となるのである。

他郷に於ける郷土の否定に基づく右の諸體験は、それが何によつて生ぜしめられたかの意識と結合して居るのを通則とする。此等の諸體験はもと他郷に在る未知なるものとの交渉より來るのであ

るが、斯る未知なるものとの交渉を餘儀なくせしめるは、熟知せるものとの交渉が不可能であつて、之との交渉に於て障害困難なく自己の欲望を充すこと能はざるが故である。即ち此等の諸體驗は熟知せるものの缺乏の故に生じたものであり、熟知せるものがあれば免れ得可きものである。此の熟知せるものとは即ち、故郷にあつて他郷に無きものである。此の従前の生活の對象たりしもの存否が、他郷と郷土とを分つのであつて、故郷を故郷たらしめるものは、實に、その缺乏の故に他郷を他郷たらしめるところの、故郷にのみあつて他郷には無きものである。此のものの存在せざることは、此のものととの現實的交渉を不可能ならしめることが、即ち他郷に於ける郷土の否定である。此の否定に媒介されて、人は他郷に於て、故郷に於ては經驗せざりし諸々の體驗を経験し、此の體驗がその缺乏の故に生ずるところの故郷のものを意識するのである。

此の他郷の否定を媒介とする郷土に特有なるものの反省乃至意識的了解の成立、即ち郷土に在るもの従つて又郷土そのものの了解の即自態より對自態への轉化は、人間的存在者そのものの特性に基づくと考へられる。特定地域的社會圈を郷土乃至故郷とする主體に對して、此の社會圈にあるものは、熟知習熟親昵即ち *Vertraulichkeit* の關係にあること前述の如くであるが、此の關係は此の社會圈にあるものの存在を成立せしめた行爲の様式が、同時に此の主體の行爲の様式であること、即ち、交渉の主體と客體との存在が、共に同じ行爲様式によつて成立つことに基づく。主體がそれを

自己の行爲様式とすることによつて人と成つた様式に従つて對象と交渉すれば、元來同じ様式による交渉に基づいて成立して居る對象の存在に、此の交渉が適合合致することは當然であり、此處に於ては交渉が對象に於て扞格乃至抵抗に遭ふ筈がないのである。故に郷土に於ては、事實的交渉を持つと持たざるとにかゝわらず、對象は既に知られ明かである。その限りに於て交渉の對象は主體に對して自明的 (selbstverständlich) である。而して一つの存在者の存在も、此の地域に支配するあらゆる生の領域の様式の綜合によつて規定されることは、先の雀の存在の一例によつても明かであるが故に、一つのものの存在が *vertraut* であり自明的であることは、同じ諸様式による他の存在も亦 *vertraut* であり、自明的なる事を示し、従つて此等自明的なる存在によつて充された場所としての此の地域的社會圈そのものも、*vertraut* にして自明的なることを示す。此の *Vertraulichkeit* は地域的限定を持ち、郷土乃至故郷から遠ざかるに従つて、その根柢をなす行爲様式の支配の減少と共にその度を減するべきであるが、今少時斯る限定を除去して言へば、此の *Vertraulichkeit* は世界との *Vertraulichkeit* なることが認められるであらう。

存在の地域的限定に注意せざるハイデッガーが、世界との *Vertraulichkeit* と言ふのも、<sup>①</sup> 右の如き *Vertraulichkeit* の意味に解することが出来るであらう。而してハイデッガーによれば、配慮従つて交渉は、その都度既に此の世界との *Vertraulichkeit* を基礎として居る。然るに此の *Vertraulichkeit* に於て

人間の存在者は、内世界的に出逢ふものに自己を失ひ、それによつて捉へられて居る (Benommen) といふ。vertraut なるが故に自明的なるものは、問ひのテーマとはならない。vertraut であり自明的なるものの代表的なるものは、日常交渉の對象とせる手許にある道具の如きであらうが、今通常物と呼ばれて居る道具と人間との交渉について見るに、最も手近かにある (nähs) もの ("Dinge") の特殊なそして自然的なそれ自體 ("An-sich") は、此のものを使用するがしかし顯はに凝視することのない配慮に於て出逢ふ。斯くの如き出逢ひ方をする此のすぐ手許にあるもの (Zunächst Zuhandenes) の存在の現象的性格を、ハイデッガーは非顯著性 (Unauffälligkeit)、非切實性 (Unaufdringlichkeit)、非抗拒性 (Unaufsassigkeit) 等の缺損的表現を以て言ひ表はし、此の非 (Un) は手許にあるものの即自固執 (Ansichhalten) の性格を意味すると言ふ。即ち vertraut にして自明的なる存在は即自態 ("An-sich-sein") に於て出逢ひ、ものがその中にあつて正さにそのものたり得る所の附託及び附託聯關 (Verweisungen u. Verweisungszusammenhänge) の中に、斯る聯關に於てもものを見る環顧 (Umsicht) は没入 (aufgehen) して居り、ものは此の時未だ問ひの對象とされ、對自的に人間に對立するものとならないのである。手許なるものが、その非顯著性から歩み出ない (Nichtheraus-treten) 限り、そのものの存在は自己を告示しない (Sich-nicht-melden)。<sup>④</sup>

然らば自明的即自的なるものが、問はれ對自的となり自己を告示するは、如何なる道によつてで

あるか？ 此の道の一つは交渉の對象例へば道具が毀損されること(Beschädigung)であつて、毀損によつて道具は使用不可能(unverwendbar)になる時、此の毀損への直面による使用不可能の發見に於て、道具は目立ち(auffallen)顯はになる。<sup>⑤</sup>更にまた道具が缺如し手許にならぬ(nicht "zur hand")時、そのものの無いのに氣附き惜しむことに於て、それは切實性(Aufrichtigkeit)の様態に入る。斯る手許存在の毀損又は缺如の道によつて、そのものとの交渉が妨げられ又は不可能となる時、先の非(二)が破れて、そのものは顯著切實抗拒的になる。此の時そのものとの交渉としての配慮が、常に既にその中に在つたところのそのものの附託聯關は、環顧的に目覺され(wecken)、その日常の現前存在(Zugegensein)が自明的であつた爲めに、それに些かも注視(Notznehmen)しなかつた手許のものが、何の爲めにまた何と共に手許にあつたかが悟られる。<sup>⑥</sup>即ちそれ迄その存在乃至意味が自覺されず注目されなかつた意味に於て、只即自的に把握了解されて居たものが、その即自固執を破られ、その存存が存在的に(ontisch)自己を告示し(sich melden)、對自的意識的に把握了解されるのである。而して一つのものの存在は、之と共にある他のものの存在と共に、そのある場所に支配する諸々の様式に基づくが故に、一つのものの存在の對自的把握は、やがてまたそれと共に同じ諸様式によつて成立する他のものの存在、従つて此等がある場所の對自的把握になる。即ち一つのものゝ何の爲めに又何と共に手許にあるかが悟られる時は、これと共に、それが於てあり

同時にまた人間の日常の世界たる環境世界 (Umwelt) も自らを告示する。此の環境世界も豫め既に眼に映じ、vertrautなるものとして既に開示され (erschlossen) て居たものであるが、それが此の時對自的に輝き出る (aufleuchten) のである。<sup>⑦</sup>

此の環境世界乃至其處 (Da) は全體としての世界であるよりも、差當り夫々の人間的的存在者にとつて特定の社會圈であり、此の自明的なるものの在る場所として社會圈は、彼の最も近く (nahe) にあるもの存在の場所であつて、その顯著なるものとして郷土が考へられる事は、これ迄論じ來つたところから、直ちに認められなければならない。斯くの如く日常 vertraut にして自明的であるが故に、反つてその了解が直接的即自的であり、反省的なる知識に迄齎らされることなきものにあつては、その毀損又は缺如によるそのものとの交渉の否定を媒介として、そのものの本質を求め之に迫らんとする反省が働くは、人間的存在者にとつて一般的であり、常に狹義の道具に於てのみならず、他のあらゆる存在に於ても認められるのである。例へば社會生活の基礎たる集團的秩序に就いて、此のことは特に屢々指示されてゐる。社會生活に於ける規準性 (Regelmäßigkeit) は、規準が整備 (anordnen) される事なくして、否それがそのものとして意識されることさへなくして、支配することがある。此の時には規準は未だ規範ではなく集團生活に内在的 (immanent) であると云はれる。斯くの如き規準は、それが無意識なるの故を以て、意欲されざるものであると考へるは明かに

誤りであつて、それが無反省ながらも意欲されて居るものなることは、一人でも之に背反して、秩序を紊つて行爲する時は、一同の憤懣が此の一人に向つて生ずることによつて明示される。惟ふに規範なる觀念は人間の意識に於て、一般にそれ迄自然的に慣行された規準への違反に接續して覺醒したであらう。少くとも此の違反が斯く意識することに對し、特に支持を與へるものであらう。⑧ 社會生活の規準に對する背反は、正さに此の規準の毀損といふ否定であるが、此の否定によつて、その意義と重要性とが反省され、意識され、その維持確保が意欲されるに至るのである。

一般に自明的なるものの毀損又は缺如が廣汎なるに従つて、對自的了解も亦廣汎になるべきである。而して斯る缺如が最も廣汎なるは、特殊な異變による廣汎な破壊の場合を除いては、斯るものたる場所乃至社會圈を去つて他に赴く場合であらう。故郷に特有なるもの故郷の内容をなすものは、郷土に於てあるものであり、郷土の内容をなすものであるが、郷土の内容従つて郷土が如何なるものであるかについての反省と意識とは、人が只郷土に生活するのみの間は充分には生じ難い。郷土に生れ郷土に暮す間、人は日常郷土に於てあるものと交渉しつゝも、此の交渉の對象が何であるかに就いての反省を持たない點で、即自的に此等の對象を持つて居ると云ふことが出来る。此の即自的所了解を轉じて對自的ならしめ、郷土の内容をなすものが何であるかを反省せしめるものは、即ち他郷に於ける郷土の否定であり、之によつて郷土は故郷に轉化するのである。

而して故郷の從てまた郷土の内容が何であるかを知ること、之を對自的に把握することは、此のものが今之を知る主體に對して、如何なる意義を有するかを知ることが根柢に含む。即ち故郷乃至郷土の内容が何であるかの對自的了解は、むしろ此の内容の現實的存在が、緊張憂悵悲寥等各種の體驗を免れしめ、その缺乏は此等の體驗を必然的ならしめるといふ、極めて重大なる意義を有することの意識を前提とする。而して故郷乃至郷土の内容の、此の重大なる意義に就いての反省はまた、自ら斯る意義を有するものへの愛着と尊重、此等のものを擁護し發展せしめんとする願望意欲を感せしめる。故郷乃至郷土の内容は、現在の自己の生の形式と内容とを形成するもの、未知不審ならずして多面的具體的直觀的に了解し、馴れ親しみ愛好するところのものであり、その缺乏は即ち自己の現在の生の自由なる活動の否定であるが故に、自己の生の存立存續を欲することが、人間に自然である限り、人が自己の故郷乃至郷土を愛し之に執着することも亦、全ての人間に普遍的に自然必然的であるべきであらう。しかも此の故郷は、幼少年時代にのみ惠またる無垢無憂にして至純なる惠福を経験せる所であり、従つてそれは美しき追憶の帳に包まれて居る所である。現在自己の有せざる甘美なる幸福と結合せる場所を、懐しみ思ふも亦人間の通性であり、人間自然の情であらう。斯くして愛郷心又は郷土愛は、如何なる人に於ても極めて自然でありまた必然的である。それは人間の幼少年時代の生空間が狭小であり封鎖性あることが、自然的であり必然的であるが如

く、またその限りに於て、普く全ての人に自然的であり必然的である。

- ① Al. Heidegger, Sein und Zeit, I. 2. Aufl. 1929, S. 76.
- ② *ibid.* S. 76.
- ③ *ibid.* S. 74.
- ④ *ibid.* S. 75.
- ⑤ *ibid.* S. 73.
- ⑥ *ibid.* S. 74.
- ⑦ *ibid.* S. 75.
- ⑧ Th. Geiger, Gestalten der Gesellung, 1928, S. 33.

## 五

以上の考察は、専ら郷土の外に出た他郷の人と此の他郷に在る存在者一般との交渉に就いて進められたのであるが、特に存在者中の根本存在者たる人間を中心として考察する時、全く同一の事態が一層明かになる。郷土を出て他郷の人となつた者は、此の他郷を郷土とする人にとつては、自己の郷土的域外より來りし人即ち外來者であり、此の地域に支配し此の地域に人と成つた人々に共通せる行爲の様式と異なる様式に従つて行爲する意味に於て異人である。此の外來者異人乃至餘所者としての他郷の人が、此の他郷を郷土とする人としての土地の人々に對して、如何なるものとして感ぜられるかは、先に指示した如く此の他郷の人が *Fremder, stranger, étraner* なる言葉を以て呼

ばれる一事を以てしても、既に充分明かである。郷土の外にあるものに就いては、郷土にあるものの如き多面的具體的直觀的瞭解の不可能なるが故に、此の外來者乃至異人も亦、此の地の人に對しては、未知なるもの不審なるもの奇異なるものである。従つて此の外來者は一方に於ては疑惑危懼の念を生せしめ、注意と警戒との緊張を伴ふが故に、自由の態度寛ぎを妨害する。他方これとの交渉は勞多くして效少きものであることを免れない。斯く緊張不安失望焦慮等を不可避ならしめる外來者との交渉を回避し、斯る體驗なくして同じ効果を可能ならしめる郷土のものとの交渉を採らんとするは必然的である。斯くて他郷の人は、此の他郷を郷土とする人によつて忌避され敬遠されることが自然的必然的であり、これまた彼が此の他郷に於ける人及び物との交渉を、一層勞多くして效少きものたらしめられる所以である。

しかのみならず未知なるが故に親しみなき異人と共にあることそれ自身が、寛ぎや暢びやかさを妨げ、これとの交渉の回避そのことが既に多少の煩勞を伴ふが故に、平靜を亂し煩累の原因となる異人は、一般に不快なる存在として反感乃至敵意の對象となり、白眼以て冷遇され敵視されることも極めて蓋然的であつて、遂には此處に異人敵視(Xenophobia)なる現象が現はれるのである。<sup>①</sup>但し斯る異人敵視異人排斥は、經濟的事情に基くことも頗る多い。一定の人口を養ふべき資源を有する團體内に人口の増加することは、各成員の生活資料の割合を減することである。此の限りに於て外

來者は生活の困窮を齎すものなる故、反感敵意を持たれるは當然である。更にまた、特定團體に特有にしてその成員に共通なる行爲の様式は、長き年月の間に自ら成立せるものが多く、斯る年月の間の共同生活が、一方には特有なる行爲様式を、また他方には共同利用の對象物を産出するのであつて、此の行爲様式に合せざるものは、共同利用の對象物の産出に何等貢獻せざりしものであり、従つて之が利用を許されざる可きものである。團體内に入ることは、此の對象物を利用することとなるが故に、外來者の團體に入る事を拒否せんとするは極めて自然である。斯くの如き經濟的事情の存在は、村落その他の地域團體に於て遍く見られる現象であつて、極めて一般的なる郷土權(Homeland-Right)は、斯る事情に基づくことが多いのであるが、此の經濟的事情と並んで、上述の如く外來者の有する異なる生活様式が、土地の人々の生活形式の統一性と恒定性とを傷ひ、彼等がその社會的精神的環境内に於て感じて居る靜安を亂す事情が、異人の嫌忌敵視に對して常に重大な意義を有し、斯くて異人自らが此の地に於て經驗する寂寥憂愁哀傷は、一層痛切深刻ならしめられ、彼の懷郷思郷の情は更らに切實深甚なるを加へられるであらう。

此の未知不審なる異人外來者乃至よそのものたる他郷の人との交渉に於て、此の他郷を郷土とする人々は、自己の郷土に一種の否定を加へられるのであつて、此の否定を媒介として、郷土の内容が何であるか、またそれが自己にとつて如何なる意義を有するかに就いての、反省と意識とを持つに

至らしめられ、從前即自的なりし郷土とその内容とが、對自的に意識されるに至るべきこと、また此の意識を介して、郷土愛を意識せしめられ促進せしめられるべきことは、改めて論ずるを要しない。只此の場合には、他郷の斷片たるよそもの外來者の入り來ることによつて、郷土を出でることなくして郷土の否定が經驗され、郷土を故郷に轉せしめることなくして、郷土が即自態から對自態に轉するのであることは注意に値ひする。併しながらまた此の場合には、此の外來者との交渉を忌避せんことが自然的であるが故に、此の土地の個々人が已むを得ずして外來者と持つ交渉、從つてまた此の交渉よりする否定も、生の特殊部分に限られ易く、故に郷土に對する反省自覺も、個人的に相異し夫々特殊の領域に限定され易きは云ふ迄もない。これに反して他郷の人となれる者自らは、自己の生の欲求の大部分を此の他郷にあるものとの交渉によつて充さざるを得ないが故に、他郷のものにある生の否定、之に基づく故郷の反省は、生の全領域に互るのである。これ郷土の反省自覺は故郷を介するのを本來とする所以である。

幾多の回避嫌疑にもかゝわらず、他郷の人たる異人と此の他郷を郷土とする人々との間に、相互の交渉が成立しなければ、只他郷にある同郷人のみ相寄つても、此の他郷に於て異人が異人として存立する事も不可能である。而してこの交渉が成立し得て、それが全き齟齬錯誤のみならざらんが爲めには、何等かの程度に於て未知不審が克服され、相互の存在が既知とならなければならぬ。

此のことは如何にしてまた如何なる程度に可能であるか？ 云ふ迄もなく異人と雖も人であり、人が人である限り共通に有する存在の様式が彼にもあることは、直ちに知られるのであるが、之は餘りに抽象的な様式に過ぎず、之のみを以てしては、具體的交渉の圓滑を期することは不可能であらう。次に異人の故郷、即ち彼がその存在行爲の様式を收得した特定地域の社會圈も亦、知られ得るであらう。併しながら此の特定社會空間に特殊なる行爲存在の様式そのものが未知なるが故に、異人が不審奇怪なのである。とは云へ此の異人の元來屬せる社會圈特有の様式が、全然未知であることは尠く、或る度に於て既知であることが通例である。既知なるが故にこそ、異人に接すれば多く先づ何處より來れるかを質し、異人の元來屬せる地域的社會圈を知ると共に、既知なる此の社會圈特有の様式が、異人自らの行爲の様式なることを、直接此の新來者と交渉することなくして豫め想定し、此の彼の既知化に基いて彼との交渉に入るのである。或る人はこれを「吾人は先づ見て然る後に定義を下すに非ずして、先づ定義を下し然る後見る」と言つた。<sup>②</sup>

然らばその郷土より外なる異人の故郷に特有なる様式が、如何にして豫め知られるのであるか？ 惟ふに此の特殊様式に就いての知識は、夫々の地域的社會圈に就いての報告記述によつて得られるか、又は各人が新來異人の故郷から此の新來者より先に此の地に入り込んだ先立つ異人と接觸交渉して把握した、此等先立つ異人の個々の行爲と存在とを基礎として構成されるかの何れかであらう。

然るに斯る報告記述を介しての知識は、それが直接具體的なる了解の基礎を缺く限りに於て、現實の交渉に役立つには餘りに抽象的であり易い。他方此の地に來た先立つ外來者、特にその中の此の土地の個々人が直接交渉を持つ外來者の數は極めて制限されて居るのみならず、此等外來者の活動範圍が、特殊な方面に限られて居ることの可能性が少くない。故に此等先立つ外來者の行爲様式が、彼等の故郷に支配する一般的な行爲の様式から見ても偏局的であり易く、斯る外來者の中の更に一部との直接交渉を基礎として、此の土地の個々人が構成する外來者の行爲様式が、一面的であり正鵠を失するものなることの蓋然性は頗る高い。斯くて新たな外來者に於て既知とされるところのものは、普遍的人間的なものの外は、事實的交渉に役立つ難き抽象的な彼の故郷の様式、或ひは新來者の了解に於て幾多の齟齬逸脱を不可避的ならしめる一面的なものに過ぎない。斯くの如き様式に従つて行爲するものとして、夫々の地域的社會圈より來る外來者の型を豫め有ち、新來者をも夫々の型に當徹めて、直接交渉に先立つて判斷するのである。

此の豫め用意して居る型や、また之に基いて下される「先立つ判斷」が如何に偏頗であり謬つたものであり易いかは、元來「豫め有するもの」を意味する *prepossession*, *préoccupation* 等の言葉や「先立つ判斷」を含蓄する *prejudice*, *prejuge*, *Vorurteil* 等の言葉が、齊しく偏見僻見謬見を意味することからも自ら明かである。而してまた此等の偏局謬錯が、先に述べた異人敵視を生ずべき諸々の事

情よりして、外來者に對して反對的否定的な側に傾き易いことも推定される。しかも「先入爲主」等の言葉によつても示される如く、斯る偏局謬錯にもかゝはらず、過去の乏しい個人的經驗を基とする類型を、その儘新たなるものに適用するは、人間の通有性であるが、特に一度作られた外來者の行爲様式従つて外來者の型は、之を他の外來者に當嵌めて訂正する機會が少いが故に、自ら固定する傾きがある。異人種に就いての偏頗な解釋、及び之に基づく異人種への反應の固定型(stereotype)が、人種的反感の基となり、社會關係に於ける危險なる要素をなすことは、屢々指摘される所である。④而して斯くの如き外來者の様式類型が、新來の外來者に於て如何に具體化されるかに至つては、土地の人々には全然未知であらう。従つて彼の個性具體的特質に至つては、何等知られない。その結果必然的に外來者は抽象的類型に當嵌められる限り、一般的類似性に於て扱はれ、その個性や個別的事情は、何等顧慮されざるを免れない。

同様のことはまた新來の異人に對する土地の人々についても云はれ得る。即ち土地の人々は、人間としての普遍的特質に於て、更には此の外來者に既知なりし、抽象的にして偏局的なる此の土地の人々の特殊な様式に於てのみ既知であるに過ぎず、その抽象的にして高次なる様式の下に於ける、具體的特殊性に就いては、何等知られるところがない。斯くて他郷の人たる外來者と土地の人々との交渉は、第一に相互の具體的個別性に何等觸れることなく、また觸れ得ざる、極めて抽象的なる

ものなるを脱し得ない。これ即ち未知の間柄にある人々の遭遇の仕方は、個性的遭遇 (Individual-begegnung) に非ずして、類型的遭遇 (Typusbegegnung) であり、相互の接觸は範疇的 (Categorical) であると云はれ、また偏見は具體的な個人 (Individuals in the concrete) に對するよりも、むしろ抽象的な名稱に對するものであると云はれる所以である。<sup>④</sup>斯くの如くにして外來者乃至異人と土地の人々との接觸交渉に於ては、互ひに多面的具體的個別的なる人間は視野の中に入らず、只抽象的普遍的乃至一面的な人間のみが、把握され働き出るに止まる。個人的な性格、特殊な事情の如きは、何等觸れられ了解されるところは無い。従つて相互の交渉が極めて空疎にして、形式的な冷かなものとなり易い傾向を持つのである。第二に又斯る形式性抽象性を越えて、相手の現實に持つ感情を汲み意想到應せんとするも、それが未知なるのみならず、彼の行爲様式と想定される既知の様式と、眞に彼が持つ様式とは一致せざるが故に、彼との交渉は勞のみ多くして却て齟齬を來し易く、此の事はまた却て相互を疎隔するに至り易い。

右の外來者乃至異人に對する片面的類型化と、之より來る冷遇敵視は、例へばロンドンに集まれる各國の外來者とロンドン人との交渉に於て、極めて明かなる具體的事例を示す。ロンドンは早くから身分的轉落者の隠窟であり、道德上の天刑病者の養育院であり、法律上の犯罪者の墓でもあつた。此處に向つて既に十六世紀以來諸國は常にその貧民を送つた。近代産業の勃興の初期以來、此

の世界的大都市に富を求め職を得んとして集り來つた各國人の數は極めて大きかつた。一度此の大  
 世界都市の住民の轟く波濤に身を投ずるならば、誰しも此處に幽居を提供された。併しながらその  
 代りにまた刑罰が科せられた。それは即ち孤獨といふ刑罰であつた。その孤獨たるや、孤獨中の最  
 なるものであつて、これにもまさつて佗びしい孤獨は無かつたと言はれる。惟ふに斯くの如き孤獨  
 は、此處に入り込む全ての外國人が、ロンドン人によつて一樣に貧民の型に屬せしめられ、貧民な  
 る言葉は外國人の別名稱に外ならぬに至つたといふ事情によるであらう。ロンドンにはまた祖國の  
 獨立の爲めに努力する愛國家、自らの主義の故に祖國を追はれて居る社會主義者の類が、歐洲各國  
 から集り來つて、一時斯る追放者の避難所の觀を呈した。而して彼等の多くは、その心情に於て高  
 潔至純なる人々であつたのであるが、斯くの如き個人的内生の特異性は、ロンドン人の考慮に入る  
 ことなく、全ての外國人は外國人なるが故に、一樣に貧民なる型に箝めて見られ、一樣に侮蔑の對  
 象とされて、ロンドンの孤獨を最後の悲痛まで、極度の酷烈まで味つたのであつた。ヘルツェンが  
 英國では貧困は同情を生せしめずして、侮蔑心を生せしめると云つて居るのも、またフォン  
 ターヌが、英人は破れた衣の下に、高貴な紳士の心の脈打つことを悟らざるに驚嘆して居るのも、  
 皆右の事實を指すものであらう。<sup>⑤</sup>斯る普遍的類型化は、嘗にロンドンに限られた事柄ではない。イ  
 タリー人はスイスその他では、汚い貧乏人として概括的に扱はれ、フランス人は、イギリスに於て

は一般に役者と見做され、北ドイツ人は南ドイツに於ては、前世紀の中頃迄は、大袈裟な效能を並べて物を賣歩くものの多かつたところとして、プロシアの欺僞師と呼ばれるのが常であつた。<sup>④</sup>

外來者の類型的把握と異人の忌避冷遇は、外來者乃至異人との接觸の機會が少い程、その度を高めることが蓋然的である。従つてそれは社會圈の封鎖性の度と比例すべきである。故に原始民族集團乃至未開人社會が、大なる封鎖性を有することを認めるならば、特定原始民族團體の成員が、他の團體に入り込む時、此の新入外來者は極度の嫌忌敵視又は酷遇を受けるべきであるが、これ果して事實であらうか？ 原始民族が相互に異族として接觸する場合は、必ず兩者の間には鬭争を生ずると言ふ、スベンサー初め多くの人々の所説を、その儘受容れる人は今はないであらうが、デュルケム等の如く、原始人は所屬集團から他の集團に入ることが自由であつたとする見解も、<sup>⑤</sup>誤れるものと言はなければならぬ。デュルケムの説は、未開人相互の機能的類似に着目し、一人の營む機能は、他の者によつても容易に營まれ得るが故に、成員が集團外に去る事は、集團にとつては苦痛に感ぜられないと説くのであるが、これは成員間の機能關係にのみ着目し、相互の心的結合の側、特に共同生活を營むものの間の愛着に注意せざるものである。しかのみならず、去られる集團の側の機能的關係からのみ考へられて、新たに入り込む集團の側から考へられてゐない。未開人の類似性は同一集團の内部、または元來同一集團體をなし、人口の増加その他の事情によつて分裂し

て生じた諸集團の成員の間にのみ限られることが蓋然的である。斯る集團以外の集團の間には、大なる差異が存在し、相互の間には何等交通も無かつたか、又は猜疑忌避嫌惡敵對の關係が主であつたといふことが、一般に認められるところである。故に斯る關係を犯して、他の種族集團内に入り込むことは、決して自由容易ではあり得ない筈である。

併しながら、通例劣等者又は敵と見做され、掠奪又は殺戮の對象となる他種族の外來者に對して、一つの例外的な待遇の仕方がある。それは即ち客人歡待 (Hospitality, Gastfreundschaft) の習俗である。此の習俗に就いて詳述して居るウエスターマークによれば、最も未開なるブッシュマン族からアイヌ族迄、また古代印度へブライ、ギリシヤ、ローマから現代日本の諸地方迄、極めて多くの民族に於て、外來異人を親切親愛を以て遇し、庇護扶助を惜しまざるのみならず、之に特殊な榮譽を與へ異常な特權を許し、あらゆる歡待を盡くす習俗が見られる。しかも斯る歡待は、慣習によつて嚴重に義務づけられて居るのみならず、往々にして宗教的な教へとなつて居る。此の事實の存在は、未開社會に於ける外來異人の嫌惡敵視を否定するものであらうか？ 斯る事實の存在に基づいて、親愛平和が多く、異種族接觸の一次的關係であるとし、異種族に於ける新入外來者は、好意を以て遇せられるとした學者も少くない。未開社會に於ける水平移動の困難に悩む外來者を見ては、未開人にも愛他博愛の情が動き、憐憫から救助厚遇が生ずるとする此の第一の説に對し、第二の説は、相

互に交通交際ある集團の成員は、今日の主人も明日は客人となることが考へられるが故に、互ひに歡待を與へるのであるとする。第三にまた、交通發達せざる未開社會に於ては、珍らしい報道を齎らすものは外來者なるが故に、新たなる消息を聞かんと歡待の一因とする説もある。此等の外なほ未開人の共產的生活態度等種々の説明が可能であらうが、此等の説も未開人及びその社會の地域的限定を顧慮せざる限り、抽象的解釋たるを免れないと言はなければならぬ。

地域的封鎖性の嚴重なりし未開人社會に於ては、所屬集團成員間には、極めて大なる等質性が存在し、また成員は相互に多面的具體的直觀的に把握了解して居ると共に、他方所屬集團の外部の集團とは殆ど接觸なき間柄に於てはまた、相互の把握了解は極めて乏しく、相互に極度に未知でも何等相互の接觸なき間柄に於てはまた、相互の把握了解は極めて乏しく、相互に極度に未知であり、奇異不審でなければならぬ。その極端なる場合にあつては、他部族の成員を自己と同様な人間の範疇に屬せしめ得ざる程である。これ同一集團の成員間の等質性が、その存在のあらゆる方面のあらゆる微細なる點にまで及び、此の等質性が全面的直觀的に了解され親しみあるものになつて居るが故に、何等かの領域に於て、微細なる差異があつても、それは直ちに強く感得され、その差異を有する者は、自己の所屬集團成員を基礎とする人間の類型に合せざるものとされ、人間に非る怪物魔鬼の類型に屬せしめられるのである。例へばメラネシアの土人は「汝は誰か」と最初に問

はれ、ば、人だと答へる。それは彼等は魔鬼や亡魂ではなく、生きた人間であるといふことを意味するのである。彼等は外來人を人と信せず、海に棲む亡魂魔鬼精靈であると信じて居るのである。斯くの如き事例は多くの人々によつて擧げられて居るが、更にまた民族間の傳説中重要な位置を占める異形族の傳説も、往古外來者を人間ならざる異様なるものの範疇に於て扱つた事實の名残りとして考へられることは、早くもメイン等の明かに指示して居るところである。<sup>④</sup>

未開人社會に於ては、外來異人は一般に異人としてよりも、むしろ超人間的なるもの魔鬼靈魂の化身と考へられたとすれば、斯るものに對して通常如何なる態度が執られるかは自ら明かである。ウエスターマークは、之に關して次のやうに云ふ。即ち、未知な外來者は、未知なるあらゆるもの及び珍奇なあらゆるものの如く、單純な心に神祕的な畏懼畏憚の感情を喚び起す。適當に扱はれ、ば、彼は惠福を齎すかも知れないが、しかし他面また彼は、災禍の潜勢的源泉でもある。彼は通常魔術に熟達して居ると信せられる。そして來訪せる外來者の邪惡な願望や呪咀は頗る恐れられる。それは彼の超自然的とも言ふべき (quasi-supernatural) 特性により、また彼が主人及びその家族にすぐ接近することが、彼をして禍を及ぼすを容易ならしめるに基づく。<sup>⑤</sup> 即ち外來者には、未知なるが故に、魔術その他の超自然的勢能によつて、潜勢的な惠福賦與者たるの可能性も、否定されない。これ往々にして外來者の來ることが喜ばれ、時には熱心に探し求められもする所以である。此の場

合の外來者歡待は、善良性からよりもむしろ超人間的なるものの意を迎へ、之に取入つてその未知なるものの祕密なる勢能、例へば魔力ある言語その他の呪術の如きを引出し、或ひは何等かの惠福を享受せんとする希求から爲されるのである。他方また外來者の大なる未知性に多分に存する災禍の可能性の故に、之に對して迷信的恐怖を抱き、その怒を避け災禍の少なからんことを期するが故に、異常な歡待を示すのである。

このことは種々の事實によつて證明されるのであつて、例へば歡待には時間的空間的な限定がある。即ち一定の距離以外に於ては敵であるものが、その距離以内に入れば歡待されるが如きは、此の距離以内では、此の外來者の勢能が接近の故に有效に作くと信せられる爲めである。また歡待が一定の日數を経過すれば、急速度に減退する場合の少ないのは、共同生活が外來者の未知性を減するが故であると考へられる。更にまた歡待に對して、何等の報酬も求められず、強いて何物かを提供すれば、却て感情を害するのは、歡待が親切から爲されるが故ではなく、害惡の可能性ある外來者の提供するものにも、害惡が宿ると信せられるが故である。故に外來者の與へたものが受取られても、多く水等を以て潔められるのである。更にまた歡待は條件呪咀 (conditional curse) であることが多い。これは外來者に或る物を食として與へれば、それが他の體內に入つて、若しも彼が災害を生せしめんとした場合には、彼の方を抑へるの作きを生ずると考へるが故に、食を強いて饗應

をなさんとするのである。

此等の諸事實によつて明かなる如く、外來者に對して、何等親しみを感ずるのでもなく、また好意を抱くのもなく、むしろ人間的同類に非るものの如くに信ずるところから、歡待が行はれるのである。此の事は、客人歡待を意味する *hospitality* なる語が、敵意を表はす *hostility* と共に外來者客人主人敵人等と齊しく意味した *host* なる語から由來して居ることからも推定されるのである。即ち外來異人に對しては、敵人として遇せられるか、又は客人として歡待されたかの二つの待遇があつたであらうが、何れの場合にも未開人社會に於ける外來者は、決して親愛親懇の間柄に入り得ず、却て極度の畏怖又は敵意を以て遇せられたと見ることが許されるであらう。故に一般に未開人社會に於ては、他郷に於ける否定が、極めて酷烈であつたと想定されるのである。

① R. Michels, *Der Patriotismus*, 1929, S. 120.

② W. Lippmann, *Public Opinion*, 1922, p. 8f.

③ E. K. Strong, Jr. *The Second Generation Japanese Problem*, 1934, Chap. IV.

④ *Ibid.* p. 103; Michels, a. a. O. S. 124.

⑤ Michels, *Ibid.* S. 121 f.

⑥ *Ibid.* S. 125.

⑦ E. Durkheim, *De la division du travail social*, 4<sup>e</sup> édit. 1922, p. 120 et suiv.

⑧ E. Westermarck, *The Origin and Development of the Moral Ideas*, vol. I. 2. ed. 1912, chap. XXIV.

⑨ Codrington, *The Melanesians*, p. 21; H. Maine, *Ancient Law*, Evr. Lib, p. 74.

⑩ E. Westermarck, *op. cit.* p. 584; the same, *A Short History of Human Marriage*, 1926, p. 15.

## 六

故郷乃至郷土を他郷から分つものは、此の兩地域的社會空間の夫々に特有なる行爲様式及び之に基づく存在類型の相違であつた。若しも初めて異郷に出た人が異郷の存在の特殊性を、これと遭遇すると同時に、直ちに把握し、此の特殊性に應じて之と交渉し得るならば、また此の交渉に馴れ巧みになり、かの對象を愛好するに至り得るならば、此の交渉は何等困難障害の否定を受けることなく、従つて此等の對象との交渉から由來する緊張、不快、不安、焦燥、憂愁、寂寥、憤激、悲痛等が體驗されることなく、故にまた故郷の内容をなすものの缺如にもかゝわらず、斯る體驗の生ぜざるところには、假令故郷と他郷との相違は存在するとも、郷土の内容への反省と意識、及び懷郷思郷の情思の生ずるいわれがない。故郷が故郷として意識され、之に對する思慕愛着が體驗せられるのは、他郷に入るとともに直ちに此の地域的社會圈に特有なる存在の特殊性を、了解順應することの不可能なるに基づくのである。他郷に入つて、此處を郷土とする人に對して、外來者となり異人となつても、其處に特異なる行爲様式を自己のものとし、自己の様式を此の新たな社會圈のそれと同じくすると、此の意味に於て此の社會圈に同化することが大なれば大なる程、外來者ではあつても異人であ

ることは少くなり、他郷にあつても此處にあるものとの交渉は圓滑になり、従つて相互の交渉に於ける餘所餘所しきは減するべきである。

然らば他郷の人異人にとつて、自己の行爲の様式を此の新環境のそれと同じくし、此の環境に同化すること、斯くてまた他郷に於て自然必然的なる緊張不快等を克服し、此の地に於ける生活を安易ならしめることは、如何にしてまた如何なる程度迄可能であらうか？ 此の問題の解明の爲めに、同化の問題一般を今此處に詳論する暇はないが、他郷乃至異郷に於ける存在類型の把握收得が、幼年時代と特に密接な關係を有する一事は、此處に特に明かにして置かなければならない。

人間には人間として本具的なる、即ち本能的に凡ての人間に備はれる行爲の様式があるであらう。それは本具的なる限りに於て、如何なる環境如何なる社會圈に於ても現はれるであらう。併しながら斯る普遍的なる様式も、それに従ふ行爲の對象の存在の特殊性に従つて、限定されなければ現實化され得ないことは云ふ迄もない。即ち現實的な行爲様式は常に特定の社會圈と相關的な特殊限定を有つ。而して人が現實的に如何なる行爲様式を持つかは、その人が如何なる社會圈に於て人となるかによつて定まる。此處に特に大切なるは、幼年時代にあつては、未だ自己の行爲様式が無く、只周圍の様式をそのまゝ受入れて以て自己の様式とすれば足りるといふことである。即ち幼年は既定の特定様式があつて、之を棄てゝ新たな様式を獲得するの必要はないと共に、他方ま

た、一度自己の行爲様式が確定した後には、之がその人にとつて固定的なものとなり、之を全く棄て、別異なる様式を執ることが極めて困難であり、全き度合に於ては不可能なのである。此の故に「成れる人(der fertige Mensch)は馴れざるものを、不快な拒否すべき障害と感ずる」ことが、自然必然的となるのである。また此の困難と不可能の故にこそ、故郷と他郷との相違が意識され、懷郷思郷が自然的必然的なのである。けれ共斯る行爲様式の未だ成らざるもの即ち幼少年にあつては、棄てるべきものを持たざるか、或は持つともそれが未だ自己に於て固定確立せざるが故に、之を棄て、他を探ることが可能である。故に幼少年期に於ては、自己の置かれる地域的社會圈の行爲様式を自らの様式となすことが、可能であり容易である。即ち全き同化は幼少年時代に於てのみ可能である。これと同時にまた、幼少年時代を過せる社會圈の様式を、成年の後に棄て切るとは不可能であり、成年の後に入り來つた他郷に全く同化することも不可能であり、従つて成年者にとつては、幼少年時代を過せる土地に於けるが如き、自己の行爲存在の様式と自己の於てある社會のそれとの完き一致は、幼少年時代を過せる社會圈以外に於ては、經驗することが不可能である。而して此のことの不可能なるは、成年の後に郷土を去るものにとつては、懷郷思郷の不可避なることを意味する。

特定の行爲乃至存在の様式は、血統と結合し、種族的に一定して居るものであるといふ考へが、

相當に一般的になつて居ると思はれる。例へば思惟形式や文章の構造は、身體的素質に根ざし、從つて生具的であつて離脱すべからざるものであるといふ主張の如きに於て窺はれる如く、特定の様式は特定の種族に特有なものであつて、此の種族に屬するものには、何時何處に於ても、此の様式が現はれ、之に反し種族の血統を汲まざるものは、如何に幼少年時代より此の種族成員と社會的空間を同じくしても、此の種族特有の様式を自己のものとし、之と同化することは不可能であるとする考へが少くないが、これは事實に當るものではない。若年にある者の順應能力が極めて強く、自己の人種に背反する様式を受入れることも出来るのである。即ち如何に血統を異にしても、幼少年時代の生空間社會圈を同じくすれば、此處に支配する行爲様式を自己の様式とし、社會の様式と自己の様式との一致、従つて此の社會に於ける人及び物との交渉の圓滑、また了解の多面性具體性直觀性を可能にすることが出来るのである。即ち此の社會を自己の郷土とすることが可能である。成年後には郷土以外の社會的空間に同化し難きこと、而してまた幼少年時代には此の事が可能にして、しかも此の可能性は、血統種族關係の差異に妨げられることを、次に二三の事實について例證して見度いと思ふ。

先づ斯る事實を現代文化民族に於て求めるならば、アメリカに於ける犯罪の社會學的研究の結果は注目に値ひする。

アメリカに於ける犯罪統計の示すところによれば、大多數の犯罪者は、所謂第二世代の者即ちアメリカに渡航し來つた移民が連れ來れる、或はその渡航後に生れた子供であることが見出される。④  
何が故に特に此の所謂第二世に犯罪者が多く、第一世代及び第三世代以下には之が少いのであるか？ 惟ふに故國を後にして、新たなる地域的社會圈に移り來つた移民は、その渡航以前に於て既に成人の年齢に達し、従つて故國に於ける特有の行爲及び存在の様式を、自己に於て固定せしめ、爲めに新天地に移り住んでも、直ちに此の故國に特有なる様式を棄て、新天地特有の様式を自己の様式とし、新天地に於ける存在者を、忠實に具體的に偏差なく把握了解し、困難障害なく此の社會に於てあるものとの交渉を行ふことが出來ないであらう。斯くの如き了解の不完全性交渉の困難といふ缺陷は、成年後に渡航せる者の終生免る可らざるところである。然るに幼少年期に渡航せる者、又は渡航後に生れた者にあつては、事情は全く異なる。即ち彼等は周圍の存在を傷ひ、之に偏差改變を加へるを餘儀なくせしめる如き、周圍の行爲の様式とは異なる様式を固持しては居ない。彼は素朴にしかも此の時代に特有なる感受性の豊さ鋭さを以て、彼が現在置かれて居る社會圈の様式を自己の様式とし、此の様式に従つて周圍の存在を受入れ、以て自我の生内容を形成せんとする。彼の生はその様式及び内容に於て、彼が現在ある社會の様式及内容にそのまゝ一致し、兩者の間には何等の偏差不一致も存在しない。斯くて彼にあつては、その社會の存在を、偏差なく微細なる點に至る

迄了解把握することが出来る。例へば言語の如きに就いて見るも、移民の兒童は渡航以前には故國の言葉を語つて居ても、渡航後には、間もなく故國の言語を全く忘れ去ると共に、新たな環境の言葉を、完くその微妙なるニュアンスに到る迄解し得るに到るのである。

然るに成年後に故國を後にせる兩親は、故國の言語を忘れ去る事がないと同時に、新たな社會の言語を完全に語り又了解することが出来ない。之に反して子供は兩親の解せざるところを解し、兩親の言葉を以てしては通せざる時も、子供が同一の言葉を語れば、直ちに意を通じ得るが如く、常に言語に於てのみならず、百般のことに於て、子供は父母の及ばざるところを爲し、父母の誤れるところを正すことが出来るのである。新しき環境に於ける對象との交渉の、親と子に於ける斯くの如き難易正否の差異は、やがて子供をして早くから、兩親よりも自己の知識が勝ると信せしめるに至り、子供の兩親に對する輕侮の念を増長せしめ、家庭に於ける父母の權威の失墜を招致せずには居ない。父母の權威の失はれた家庭に於ては、家庭の訓育の行はれる理なく、其處には兩親と子供との間の不斷の衝突争闘が續く<sup>①</sup>。斯る事情の下に成長する第二世代の子弟が、放縱粗暴なる生活に墜る可能性は頗る大である。而して幼少年時代より放縱粗暴なる生活に墜せるものは、やがて犯罪者となり易い道理である。第二世代の者に犯罪者の多いのは、正さに此の理によることは自ら明であらう。同時にまた、第二世代の者に於て犯罪性を蓋然的ならしめる親子間の相違は、親子共に

幼少年時代を同一の社會圈に於て過す第三世代以下に於ては成立せず、従つてまた第三世代以下に於ては、犯罪者の生ずべき蓋然性少き理も亦同様にして明かである。

右の如き事實がアメリカの移民一般に就いて認められるのは、種族如何にかゝわらず、成人後の渡航者は、アメリカに特有なる様式を直ちに自己の様式とし、アメリカ社會に同化融合し難きに反し、幼少年時代をアメリカで過し、此處に育つものは、人種の差異にかゝわることなく、アメリカの様式を自己の様式とし得、アメリカに於てあるものとの交渉把握を、正しく容易に爲し得ることを、示すものと云はなければならぬであらう。單にアメリカ合衆國に於てのみならず、「到る處に於て、第二世が母國(Ursprungsvaterland)から全く背反し、出生地(Geburtsvaterland)に完全に、情魂共に、没入することが觀られる。」といふは、幼少年時代を過すことそれ自身が、郷土の決定に對して如何に重要な意義を有するかを、明確に示すものである。但し第二世が完全に出生地の社會に同化すると言ふのは、嚴密に言へば當らない。假令權威の失墜と輕侮、壓制と反抗はあつても、父母は幼少年時代の生空間の最も主要な構成要素であつて、第二世とその父母との交渉は繁く、飽く迄維持され、父母の母國的思想感情意欲の様式が、或る度迄第二世代の中に入り込まずには居ない。只その程度が極めて限定されて居り、父母又は之と等しく同一様式を固持する人々との交渉に當つてのみ、主として現實的に妥當するのである。第二世代の子供即第三世代に對し

ては、第二世代は自己の父母の母國の様式に於て交渉し、第三世代を此の様式に於て成人せしめやうとはしない。斯くて第三世代は、その幼少年時代に祖父母の母國の行爲様式を執るものとの交渉殆どなく、自己の生れし地の様式を自己の行爲様式として成人するが故に、第三世代に至つて同化は完全に行はれるのである。同化の研究を第三世代に迄及ぼした點に於て特に注目し値ひするガンカンは、第三世代に至つて初めて同化が迅速完全に行はれ、舊い母國の文化の殘滓も、殆ど認められなくなることを指示して居る。即ち彼によれば第三世代のアメリカ人の驚くべき多數の者は、言語に於ては既に完全に同化して、祖父母の母國語は寧ろ好奇的興味の対象として扱ひ、或ひは全く嫌惡を感じる程に至る。更に祖父母の屬して居た種族や民族の慣習傳統歴史の如きに對しても、關心を持つものは極めて尠く、彼等は既に遙かに遠くそれ等のものとの交渉の圏外に置かれて居る。否彼等は彼等の祖父母が何處に生れ、如何なる民族に屬して居たかさへも明かに知らないのである。斯くて彼等は、今や彼等から餘りにも隔絶してゐる彼等の祖父母の母國に對しては、何等繋がりを持たず、況んや之を懷しみ戀ふが如きことは全然ない。此處に於て同化は初めて眞に完きに到つたと云ふことが出来る。故にガンカンは結んで言ふ、「第一世代はアメリカに於ける同化の過程を發足し、第二代之を一層進め、第三世代に到つて確實に之を完成する」と。<sup>⑥</sup>

更に種族血統にかゝわり無き幼少年の同化の事實を、未開民族について求めるならば、それは例

へば、征服種族の言語が、被征服種族の言語によつて征服される事實に於て見出される。未開人種の諸種族團體間には、鬭争の多いことは、スペンサーを初め多くの人々の認め主張するところであるが、斯る鬭争が何を目的として行はれるかと云へば、その主なる目的として二種のものを擧げることが出来る。その一は被征服民の女子を掠奪する事であり、その二は被征服民を被支配階級乃至奴隸階級として、經濟的勞務を之に荷はしめる事である。征服種族が持續的に定住しない場合、例へば狩獵種族の如きにあつては、征服された種族の男性に農耕を行はしめる爲めに之を奴隸とするよりも、寧ろ男性を殺し女性を分配する事がある。此の場合征服民の言語が、被征服民の女子までも加へた新團體の言語とされること、當然と思はれるであらう。けれ共征服民の言語は、征服以前の儘に保存されるのではない。といふのは被征服民の女性は、既に成年期に達してゐる以上、被征服以前の自己の言語を、全然棄て又は忘れ去つて、征服種族の言語をその儘學び、之を専ら自己の言語とすることはない。即ち夫々の場合によつて異るとはいへ、多少征服される前の言語を用ひるのである。然るにこの被征服種族の女性と征服種族の男性との間に出來た子供は、母と共に暮し、男性は狩獵や戦争の爲めに、子女を離れて廣い地域を彷徨する。故に子供は自己と共にある母の言語を覚え、之を自己の言語とするのである。子供の狭き空間に於てあるものの主要なるものは母であり、母の行爲様式生内容が、同時に子供の行爲様式生内容となる。これ子供も女性も共に、

その生空間が狭く限定されて居ることよりする必然的歸結である。次に若し征服種族が支配者として、被征服種族なる農耕民を支配する場合には、言語に於ては、多數なる被征服種族のそれが勝つことが少くない。征服種族の子供は父と共に遠くに出ることは出來ず、土地に繫縛されて居る被征服民と同じ地域に留まり、その子供と遊び、種族的差異にもかゝわらず、被征服民族の合して成れる、新たなる集團の占有する地域の言語を學ぶ。<sup>⑦</sup>

原始社會に見られることは、また現代に於ても同様に見られる。特に征服支配の上下關係にあらざる移民の場合に於て、移民が移住民の女性を娶るならば、子孫への環境の影響は決定的に大となる。<sup>⑧</sup>即ち子供が常に共にある母の言葉その他の行爲様式を自己のそれとし、家にあること少き父のそれを最初から疎んずるは當然である。猶また幼少年時代に常に共にあり、常に交渉するものとしては、母に次いで僕婢がある。「家庭にある僕婢は交婚を除いては、同化を促進する最も有效な方法である<sup>⑨</sup>」といふ言葉は、僕婢の行爲の様式が、その世話保護の下に置かれる幼少年の行爲様式となり易い意味に於て、眞理として認められなければならない。

右の如き事實によつても明かなる如く、幼少年時代を越えたものにとつては、幼少年時代を過せる社會圈以外の所に於ては、完き同化は不可能である。従つて幼少年時代を過せる社會圈以外の地域は、如何なる所も遂に他郷乃至異郷たるを免れない。同時にまた彼にとつては、彼が幼少年を過

せる土地は、他の所に於ては不可能なる對象の多面的具體的直觀的了解を可能ならしめ、他の所に於ては經驗すべからざる寛ぎ安らぎを可能ならしめた場所として、常に回顧憧憬を向けられる故郷となつて居るのである。

然らば、郷土と他郷とを分ち、その時を越えては、異なる地域的社會圈との同化の不可能なることによつて、故郷を異郷に對して意識せしめ思慕せしめる幼少年時代は、抑も出生以來幾年の期間に當るのであらうか？ 同化の可能性を許容し、郷土乃至故郷の成立を基礎づけ得る幼少年時代の年齢的限界如何？ 此の意味に於ける幼少年時代は勿論これを一義的に確定することは出来ない。たゞこれ迄論じ來つた如き幼少年時代の諸條件の備はつて居る期間を以て、此處に所謂幼少年時代としなければならず、而してこれは歴史的场所的に種々相異するのである。第一に自我の存在及び行爲の様式と内容との確立について見れば、これは人間の新環境への同化融合の難易によつて計り得べきであらう。今如何なる年齢迄に異なる土地に移住したものは、此の土地の様式への同化順應を完全に示し得るかについて、ミヘルスの論するところに従へば、大體十一歳乃至十三歳以前に渡航せる者は、内面的に新しき郷土乃至祖國(Patria)の一員と化せられ、完き同化順應を示し得るに對し、此の限界を越えた年齢の移民の大多數の者は、その心意(Psyche)が既に渡航以前に形成され、その形成が新しき地域的社會圈のそれとは異なる様式に於て、行はれて居るが故に、新たなる

環境に對し、心理的に閉ぢられて居ることが明かなることである。またストロングの年齢による趣味の變化の研究によれば、二五歳から五五歳迄の間は、比較的僅少な變化があるに過ぎず、一五歳から二五歳迄の一〇年間には、稍々より大なる變化があるが、多分生涯の最初の一五年が、吾等の好惡の確立される主要期間を構成するであらうと言はれる。<sup>⑩</sup>故に此の自我の存在行爲の様式の確立の點よりすれば、人種階級その他による相異はあるとしても、略々一三才乃至一五才迄を幼少年時代といふことが出来るであらう。

更に他の條件たる地域的限定に就いて見れば、これは生理的條件經濟的條件交通條件等に制約されて、一定しないのは云ふ迄もない。近代の如く交通手段の發達せる時代には、幼少年も早くから自己の足が自己を運び得る範圍外に出て、此の廣き空間に於てある諸々の對象と交渉を持つことが多い。このことが多くなりまさるにつれて、吾等がこれ迄幼少年時代の地域的限定となしたところのものを失ひ易いが故に、近代になるに従つて、幼少年時代の期間が短縮されねばならない道理である。若し夫れ幼少年時代の無垢無憂に至つては、特に各人の家庭の事情經濟的條件に依屬すると大であつて、貧民は早くから勞働する事を餘儀なくされ、荒き世の辛勞に揉まれなければならぬが故に、幼少年時代の甘美なる無垢無憂の時期を早く閉ぢ、此の時代に別れを告げなければならぬであらう。

これ迄述べ來つたことによつて、最初に故郷を故郷たらしめる基底は、一定の場所に幼少年時代を過すことであるとした想定の正しい事の理由と事實上の證明とが、明かに示されたと云ふことが出来るであらう。如上の郷土の本質的基底はまた、民衆の直覺的な常識の中に正しく把握されて、俚諺に直截に表現されて居る。その一つを擧げるならば、ロシアの俚諺は「元の故郷は生みの母、第二の故郷は繼の母」と云つて居る。これ即ち、第二の故郷に如何に長く暮しても、それは幼少年時代を経て自我とその内容との確立の後に來り住んだ所であり、其處に於ける生空間が、幼少年時代に於けるが如き限定なく、擴大されたものであり、而して、幼少年時代にのみ特有なる、やさしくいたわりに満ちた生活、希望に美化された未來への待望の於てありし場所と云ふ特質を缺く限りに於て、幼少年時代を過した第一の故郷、元の故郷には、故郷性に於て比ぶ可くもなく、已に質的に根本的な相違を有つものなることを、云ひ表はして居るものと云はなければならぬ。

幼少年時代の限界は一定しないとしても、何人も此の時代を過した後に他郷の人となれば、他郷が我に加へる否定を免れることが出来ないのみならず、斯る否定は假令その度を減ずるとしても、終生それを脱却することが出来ない。故に此の否定に基づく懷郷思郷の情は、何人にも常に折に觸れて感ぜられるのである。只平素は未知なるものの克服に心躍り、新たなる運命の開拓の希望に燃えて、此の懷郷思郷の情が抑へられて居るに過ぎない。併しながら人が異郷に於ける現實の生の苦

闘に疲れた時、取巻く未知なるものの中にあつて、自己の理想目的を追求し、之に緊張努力を集中して、押寄せ来る不安悲寥憂悶哀愁をもとせざるに足る生の力の充實を失ふ時、他郷の否定は切實に感ぜられ、病の如く思郷の心湧くを覺えるのである。特にそれに向つて緊張努力を捧げる可き活動の對象を缺く場合には、他郷の故に味はざるを得ない焦立たしき物足りなさ遣瀨なさを知らずして、満ち足りた平和平靜なる生活を恵む可き、熟知せる人馴れ親しめるものの於てある場所、而して其處に於て、自らが幼少年の時代の幸ある生を送れる場所としての故郷を、懐しみ慰ぶの情に堪へざるものあるは極めて自然である。斯くの如き生の力の缺乏希望の光の衰頹の著しい場合は、病氣の時及び老年期であらう。特に既に長く異郷に暮した後なる老年期に、猶懷郷の強きものあることは、幼少年時代を過さるる土地に長く生活しても、其處が遂に郷土となり難きことを物語るものでなければならぬ。ナポレオンがセントヘレナに流謫の身となつてからは、アフリカの孤島なる異境絶域にあつて、凡てのものが未知にしてよそ／＼しいと共に、生の緊張と努力を捧げて追求す可き目標を全く奪はれて、上述の如き懷郷思郷の情に身を任せる可き條件の兼ね備はつた境涯に置かれたのであるが、彼が此の境涯に於て、己が故郷として戀ひ懷んだのは、彼の生涯の大部分を占める輝しい閱歷の中心地であり、彼の不朽の名聲を縁どる地たるバリーに非ずして、實に彼の無名平凡なる生活を育んだ所、今日も猶特に此の地を愛でる人もない荒蕪の地たるコルシカであ

つた。彼がこの故郷の島を指して、これにまさる暮しよく又大氣の香ぐはしき所なしといふ述懐を漏して居るのは、<sup>⑭</sup>一〇年にしてその郷土を去つたロバート・オウエンが、アメリカに於て集産主義の實現を種々試みた後、一八五八年に死に近づけるを感ずるや、自己の生れた町ニュータウンに赴き、その両親の墓場を永き想ひの場所として、此處に自らをも葬らしめたといふ事例の如きと共に、<sup>⑮</sup>如何に幼少年時代を育まれ過したといふことが、故郷従つて郷土の根本的條件をなすものであるかを、明確に物語るものであらう。

⑭ Michels, a. a. O. S. 138.

⑮ Hising, Völkerschichten in Iran, in Mitteilungen d. anthrop. Ges. in Wien, 1916, S. 218.

⑯ Michels, a. a. O. S. 137.

⑰ Strong, op. cit. p. 258.

⑱ Michels, a. a. O. S. 136.

⑲ Duncan, Immigration and Assimilation, chap. XII.

⑳ F. Hertz, Rasse u. Kultur, 3. Aufl. 1925, S. 118.

㉑ Michels, a. a. O. S. 153.

㉒ Park and Burgess, Introduction to the Science of Sociology, 1921, p. 739.

㉓ Michels, a. a. O. S. 138.

㉔ E. K. Strong, Jr. Change of Interests with Age, 1931, p. 74.

㉕ Sprachwörterbuch, hg. v. Lipperheide, 1907, S. 383.

② Michel, a. a. O. S. 57.

③ H. Herkner, Owen im Handwörterbuch der Staatswissenschaften, 4. Aufl. Bd. VI. S. 782.

## 七

郷土をして郷土たらしめるところの郷土の内容は、幼少年時代を送れる場所に特有なるものであるとするならば、幼少年時代が持つ特殊條件が、幼少年時代を超えて猶存する地域的社會圈に於ては、郷土を郷土たらしめるものが特に著しく存在し、斯るものの存在すること著しきにつれて、此の地の郷土性が特にその度を高め、従つて此の地に育つた人が一度他郷に出れば、その郷土を偲ぶの情も、他の地方の人が他郷の人となつた場合よりも甚しかる可きである。今茲には、此の事を幼少年時代の持つ諸條件の中、特に重要なものと考へられるところの、地域的封鎖性及び狹隘性に就いて考察することとする。

先に未開人社會が、幼少年時代の生活の地域的限定を、嚴密にし廓大して展示する事を指示したのであるが、然らば未開人には熾烈強靱な愛郷心懷郷の情が見出されるであらうか？ ウェスターマークは此の事を明確に肯定する。彼は未開人が、單に定住種族のみならず、遊牧種族さへ、その出生の場所と、自己が慣れ親しめる生活様式 (mode of life) に對して、大なる愛を抱き、彼等が他郷にある時、如何にその故郷を戀ふるかに就いて、幾多の感動を誘ふ事例を擧げて居る。その中の

有名なる一例のみ引用すれば、マダカスカルのホヰ族は、旅に出る時は、屢々その故郷の土の一小部分を擁帶し、故郷を離れて居る間之を眺め、自己が早く歸つて、その土をそれが取られた所に戻すことの許されるやう、彼等の神に祈願するのである。

次に郷土の基底を地方的に見るならば、社會の地域的封鎖性は、地理的條件によつて決定されることが少くなく、一般に山嶽地方は、山脈によつて區切られた幾つかの狭小なる地域に分たれ、此の狭小なる地域は、四圍に重疊する山嶽によつて、自ら嚴密なる封鎖性を持つ孤立地域となり、山嶽が交通を妨げる限りに於て、此の地域が此處に生を受けたるものの終生の生空間であり、此の狹隘なる生空間の限界は、幼少年時代の生活を持つ地域的限界以上に出る事甚しくはない。斯くて此の地に生れたものは、幼少年時代に於ける人及びものとの交渉の特質を、その後の生活に於て益々高め又強めて行く。即ち此等の人々は、その社會に於てあるものの把握了解の、多面的にして細部に及ぶことの度合、更に又その社會に於てある所のものに馴れ親しみ、之を處理し扱ふことに於て巧みにしてまた之を愛好することの度合に於て、比類なく優れて居り、従つて此の郷土の生活は、心の緊張悲寥憂悞を生ぜしめることなく、寛ぎ安んせるものとなることに於ても亦、比類稀なる可きである。他方、一度此處に育つた人が此の封鎖を破つて他郷に出でんか、郷土の封鎖性の故に、他郷に在りながら彼の故郷に入り來ることなかりし故に、彼に未知なるものが特に多く、此等のも

のの未知不審の度は、封鎖性緩き社會に育ち、既に多少他郷の特殊なるものにも接する機會ありし人々に於けるよりも、遙かにまさる可く、此の事はやがて、山間より他郷に出た人をして、己が故郷を偲び懐しむの情に堪へざらしめる筈である。果して事實も亦斯くの如くであらうか？

山嶽による地域的封鎖性を與へられた地方と云へば、歐洲に於ては先づアルプス地方に着目す可きであるが、此の地方の封鎖性が古來如何に大であつたかは、人種の移動が直截にこれを物語る。非アーリア的分子が特に多くアルプス地方に残存して居る事は、言語の研究が示し、人類學、有史以前及び古代の傳承も、アルプス住民の原種族をなすは、インドゲルマン人種に非るものであつて、只表面的にゲルマン化されたに過ぎぬものなることを確認する。入り込むに難くして、その不毛の故に餘り好まれぬ山嶽地方は、住民の混血と言語とに於ける變化の、極めて徐々に現はれる事に於て著しい。今もその残りがアルプス地方で見出される言語は、嘗ては周圍の丘陵及び平野の地方でも用ひられたが、此處では既に早く新たな民族の波によつて洗ひ去らされたか、又は分り難い迄に變形され了つた。例へばアルプス住民と南獨逸人の方言の特質は、一般に先住民族たるエトルスカン民族の影響を示す。又人種の體質の點から見ても、正さにアルプス地方に於ては今日も猶眞の前世界の型が活潑に彷徨して居る。これ高山地帯が一般に、全世界に於ける民族博物館であるとされる所である。<sup>②</sup> 此等の事實によつて明示される程古來封鎖性の嚴なりしアルプス地方の主要なる地域と

してのスイスについて見るに、スイス人は元來感傷的な素質を有つてゐるのではないが、その祖國の民族性及び自然の特異性への熱情的な愛着は、ドイツ又はフランスにあつても、既に彼等を激しい懷郷病にかゝらせる。スイス人は古くから懷郷の特殊性能者(Dezialist)と云はれ、又愛郷心を屬性(Attribut)とするもの、愛郷の稟性ある(Begabt)ものとして定評がある。このことは、Heimweh(懷郷)なる言葉が元來スイス語であつた一事によつても示されるが、スイス人には文學上特に愛郷乃至懷郷的作品の傑出したものに富むことも亦、これを證するものである。

併しながら懷郷思郷は、郷土を離れて他郷による郷土の否定を経験する時に、初めて生ずるものであるが、交通不便にして、郷土への愛着特に深きスイス人が、何故にその愛する郷土を離れるのであるかと言へば、増加して行く人口に對して食料資源に餘りに乏しい土地は、假令一時の出稼の爲めにも、スイス人を外國に驅り出すのである。此のことは體力と敏捷さとに對して鍛鍊的な戸外の勞働、及び相撲や之に類する競技による訓練と合して、中世の末期にスイスの傭兵なるものを生ぜしめた。ブルグンドの騎士隊に勇敢な打撃を與へた後は、スイス聯邦人は全歐洲で最も希求された傭兵となつた。<sup>③</sup>此のスイス傭兵は、故郷の民謡、特に高山の谷間に經驗される山彦の幾重にも生ずる反響を再現する、同一階調の諸音の長引かせた單調な交代を持つ民謡を聞くにつれて、思郷の情止み難く、歸郷せんとして逃走するもの續出するに至り、その隊列の間隙餘りに多くなる爲めに、

遂に主要民謡を歌ふことを、死刑を以て禁止したと傳へられる<sup>④</sup>。これは民謡によつて聯想される故郷の人やものが、全體的直觀的に意識に浮ぶと共に、此の明確にして充實せる表象に對應する感情情緒も亦激しく強く、これに基礎づけられる郷土の懐しさも亦極めて切實になり、遂に隊列を離れて歸郷せざるを得ざらしめる程、力強く心を動かす事を物語るものでなければならぬ。此の全體的直觀的にして、鮮明且つ生動せる故郷の追憶は、山嶽による郷土の地域的限定としての封鎖性に基くことは言ふ迄もない。

スイス人の愛郷心、郷土の獨立と自由の擁護を最もよく表明するものとして語り傳へられるテルの事跡の如きも、郷土にのみあつて他郷になきもの、即ち郷土を郷土たらしめるものが、他郷のものによつて犯され傷はれることから、この愛好し愛着するところの郷土のものを守護せんとする意欲が、スイス人に如何に強きかを物語る事跡と見ることが出来るであらう。更に又現代スイス人のアメリカ移民を見るに、此處にも亦彼等の愛郷心の強烈なることが、種々の形を執つて現はれて居るのが知られる。例へば彼等は、自己の子弟の中等教育は、之を故郷に於て受けさせる爲めに、子弟を皆スイスに送るとのことである。更に又、彼等は口を開けば故國を讚美し、筆をとつては故郷に就いての感激をものして、アメリカ人をしてスイスを訪ねしめる可き宣傳を怠らないといふ<sup>⑤</sup>。斯くの如き強烈な郷土愛乃至祖國愛は、常にスイス人に於てのみならず、バイエルン人チロール人北

部イタリー人の如き、アルプス地方の住民の全てに見られるところであると云はれるのは、他に種々の事情もあるであらうが、山嶽の地域的封鎖に依ることが大であると想定して誤りないであらう。

地理的に見て地域的封鎖性の嚴密なる所には、郷土愛が強烈なることは、スイス人に於て充分明かになつたが、同様にまた周らずに海を以てせる地方も、等しく明確なる空間的限定を持つが故に、斯る地方の人々に於ても、熾烈な愛郷懷郷の情が見出されるであらう。けれども今は此の方面の考察は略して、時代的に見て封鎖性の嚴密なりし頃、果して郷土愛が強かつたか如何かに一瞥を投ずるならば、交通の發達する以前の時代にあつては、各地方の封鎖性は極めて大であつて、これに従つて各地方の郷土性も極めて大であつた事が見出される。例へばルイ一四世時代のフランスに於ては、哲學者や社會批評家は、都市と田舎との住民の差異を、人種的差異の如くにさへ考へてゐたのであつて、極めて長く都市に定住してゐる田舎出の者は、大都市の出身者とは、殆ど別異な人々と見做され、野蠻人 (des barbares) 異人外人とされた。また田舎出の貴族の如きも、パリでは最初全く外國に居るが如く感じたのであつた。<sup>⑦</sup> 斯ることは、當時都鄙の交通が如何に少く、地域による生内容の差異が如何に大きく、従つてまた他郷に於ける同化が如何に困難なりしかを物語るものであるが、近代産業勃興の初期に於ても、下層民の郷土との精神的結合には、猶絶對的に近き

ものが殘存して居たと言はれる。これ下層民は、漸く發達し初めた交通機關を、充分に利用する資力も無く、従つて己が幼少年時代を過した土地の外に出て、見聞を廣めることなく、彼等の生空間が自己の狭い郷土内に封鎖されて居たが爲めであらう。その郷土の境界の彼岸にあるものに就いては、只存在の抽象的普遍的なる部分に就いて了解を持つのみであつて、具體特殊なるものに何等觸れ得ないが故に、他郷に存在するもの多くに馴れ親しむことが全然なく、斯くて彼等は他郷にある人及びものに對して何等愛好を感ぜざるのみならず、むしろ嫌忌を禁じ得ないのである。斯くの如き時代にヂアン・バプチスト・セイは、多數の雇用労働者をその家族と共に、或る地方から他地方に移し、此の新たな地方に於ける彼等の生活を出來る限り心地よきものにせんとして、あらゆる設備を施し與へたのであつたが、此等労働者の愛郷心は非常に強く、數年のうちに殆どその全部が、故郷に歸還して了つたのであつた。<sup>④</sup>これ即ち此の時代には、労働者の水平移動が、如何に高度に隣接地も外國と異らぬといふ、離郷の病的嫌忌に影響されたかを、如實に示すものと言ふことが出来るであらう。

懷郷郷愁を基底づけ、離郷嫌の忌を必然的ならしめるあらゆる情緒は、全て他郷に於ける故郷の内容の缺如より來るとすれば、他郷に於て故郷の内容をなすものを見出すことは、反對に此等の情緒を鎮め、更に喜びを與へるであらう。通常郷土に於ては平凡にして何等關心の對象とならぬもの

も、他郷に於てはそれの稀少性の故に、その希求價值を高め、只郷土のものであり既知の度の大なるが故に、之と密接な關係を持つに至ることは、極めて自然である。更に郷土に於ては、嫌忌され又は互ひに反撥し合ふ關係にあるものさへ、なほそれが他郷の未知なるものに於て見出す可らざる *Vertraulichkeit* を有する事に動かされて、之との交渉が積極的に求められるに至る。單に同郷なるが故に、同郷人が會合團結するは此の理により、郷黨相結び相扶けるは、懷郷愛郷と同じく、自然必然なる現象であり、價值判斷以前の普遍的事實である。

而して此の自然的傾向は、他郷に於ける故郷のものが稀少なれば稀少なる程強まることも自然である。此の稀少性は故郷の封鎖性の大きなるに従つてその度を増す。故に故郷が地理的に封鎖された地方の人々に於て、此の傾向は特に強いことが見出されるであらう。同時にまた此の稀少性は他郷の故郷からの距離の大小に比例する。これ理性的には距てる様に作可き影響が、地域的距離が絶大な場合には、長き習慣から生れる本能的な結合感情に負けると云はれる所以である。<sup>⑨</sup> 啻に理性的には分離背反すべき間柄の者のみならず、郷土にあつては感情的習慣的に反對憎惡の關係にあるものも、萬里の異境にあつては睦び合ひ扶け合ふを通則とするのである。ガイガーは我等に於ける接觸の用意 (*Kontaktbereitschaft im Wir*) を説くが、此の我等を構成するは同一集團の成員であつて、所屬集團を等しくし従つてその集團に特有な行爲の様式を共通にするものは、その集團に屬せ

ざるものよりも屬するものとの交渉接觸を好み、之を實現せんとする心の用意を有するのである。徽章なるものの一つの機能は、右の接觸の用意を表示するところに存するとも見ることが出来る。

ガイガーは此の接觸の用意が種々の條件によつて制約されて居ることを認め、特にその最も明瞭に顯はれる場合は、外國に在る民族的同胞間に於ける場合であるとする。此の場合には集團からの離隔といふ同じ境遇が附け加はるので、人は言語によつてそれと知られる同國人に、心からなる挨拶をなし、彼とは直ちに多少親懇な關係に入る。斯く外國では人に對する選り好みが減り、郷國では氣にも止めぬやうなものや、又餘り氣の合はぬ同國人さへ進んで愛好する。郷國に於ては近寄りもせぬ不快な者にも、外國では扶助を與へ同情を注ぐ。併し斯る場合に愛好し扶助同情を與へるのは、相手の人格の全部ではなく、相手に於ける我と同一集團の成員たる部分、即ち我と等しき行爲様式を有する限りの相手である。故にガイガーは此の關係を我等の上に立つ自我と他我の關係 (*Wit-gegründete Ich-Du-Beziehung*) と呼ぶ。<sup>⑩</sup> 水平移動が困難であり、郷土の基底の傷はれざりし中世末期から近世初期の頃、歐洲の著名な大學に遠く故郷を離れて遊學した者は、何れもその故郷に従つて分れ、同郷の者相寄つて團體を結んだ。元來血族團體を意味した *natio* 又は *nation* なる言葉が當時は一般に、此等郷土を等しくし、従つて行爲の様式と内容を等しくするものの結成せる、學生の郷黨團體を意味し、此の語の斯る用法は、今に至るまで殘存して居る程、此の種の團體が歐洲各

地の大學に成立したのも、極めて自然であると言はなければならない。(未完)

- ① Westemarck, Origin and Develop. vol. I. p. 168 sq.
- ② Hertz, a. a. O. S. 125, 151.
- ③ A. Kirchhoff, Nation und Nationalität, 1905, S. 38.
- ④ Michels, a. a. O. S. 58 f. 204, 214.
- ⑤ ibid. S. 60.
- ⑥ ibid. S. 104.
- ⑦ ibid. S. 96 f.
- ⑧ ibid. S. 62.
- ⑨ ibid. S. 65.
- ⑩ Th. Geiger, a. a. O. S. 55.
- ⑪ F. Hertz, Wesen und Begriff der Nation, in Nation u. Nationalität, I. Ergänzungsband für Jahrbuch für Soziologie, 1927, S. 4 ff.